

里山は宝の山！

ー多様な人々の経験を活かした交流と学びの推進と保全・活用による地域の魅力づくりー

1. はじめに一人をひきつける里山とはー (5分) 13:20~25

(1) 里地里山の多面的機能

自然、文化、社会

自然の恵み（山菜、農産物、水）、原風景、癒し、温暖化防止など

(2) 秦野市生物多様性地域連携保全活動計画から考えること

「活用」、「誇る」、「学び・楽しむ」、「みんなで」というキーワードから考えること
多様な人々が参加し、それぞれの経験を活かして、学びながら交流・実践



社会教育的な観点が重要

(3) 社会教育とは

- ・自分達の暮らし・生活・労働をよりよく豊かなものにしていくための学び、そして実践
- ・成人教育：すでにいろんな経験をしてきている。それを活かして学び、実践
- ・里山にはいろんな人たちによる蓄積（知恵・技術）、そして外からかかわる人は実に多様な経験・ノウハウをもっている（観光・産業・IT等）

2. 事例紹介

多様な人々をつなぎ、活かして取組むことで成果を挙げている事例等を紹介。

(1) 山形県北部山村集落の試み (10分) 13:25~35

社会教育と里地里山の保全活用ーおじいちゃん・おばあちゃんが先生ー

地域概要（山形県内陸北部、月山北麓の村、地区人口約900名の山村集落）

1) 話のポイント

- ・身近な環境を見つめなおし学ぶことから出発
- ・社会教育を通じて学びを実践に
- ・地域住民が「里の先生」として活動主体に

2) 社会教育と地元学

- ・地元及び自分たち自身を見つめなおす「地元学の試み」
- ・集落住民みんなで、外の目線の違いを活かして地域調査を実施
- ・聞いて、見て、やってみて体験的に調べ、みんなで共有

3) 学んだ(気づいたこと)ことを生かす

- ・地元学における地域調査はまさに生かしていく・実践していくための学び。
- ・出てきた地域資源を実践的に生かしていくためのプランを調べた人が作っていく。
(つまり住民、「調べた人が一番詳しくなっている」)

4) おじいちゃん・おばあちゃんたちをいかすしかけ(里の先生)

- ・里の先生の募集を呼びかけ
- ・集落の人間関係や作法も利用しながら募集(当初100名→200名/900名が登録)
- ・山の学校、川の学校、農の学校(田んぼ・はたけ)、食の教室、ものづくり塾、民話塾

5) 取組みの展開

- ・外部参加者との交流
- ・地元の日常的取組みに立脚しながらプログラム化
- ・ツーリズム(教育ツーリズム)の展開
- ・1億円の効果が、次世代を担う若者達が村に住み続けるための生業作りを目指して

6) ポイント

- ・住民主体の地域計画作り
(外の目線の違いを活用しつつ自分たちで行う地元学調査とビジョン作り)
- ・日常生活に立脚したプログラムとカリキュラム作り
- ・日常の何気ないありふれた素材をカブける
(保全と伝承、再創造、再活用、そしてコミュニティビジネスへ)
- ・人材育成(担い手育成)
まずはそこにすんでいるおじさん、おばさん、じいちゃん、ばあちゃんが元気に暮らすことが一番の人材育成。そこに若者は引き寄せられてくるもの。

(2) 里山における幼児教室NPO大地の取組み(長野県) (10分) 13:35~45

ポイント

- ・耕作放棄地や里山を緩やかに保全管理
- ・里山を利用した幼児子ども教室を開園
- ・意識の高い若手世代層が地域に移住し地域活性化

1) 自己紹介

長野出身、長野にいた際の話。4歳の息子、1歳の娘。

信州の豊かな自然と文化。

こうしたものを活かした生きる力を育む保育をしていきたい。

でも、なかなかこうした保育活動の魅力が地域で気付かれず活かされていない実態

2) 集落の里山を生かした保育園

リング農家出身の当時30代の青年(青山氏)が、都会での保育園勤務を経て村に戻り、自己所有の山林を園庭にして手作りで保育園を開設。

3) 手づくり、理想の幼児子ども教育を目指して

集落の生活の息遣いを感じることができる里山で

緩やかな里山管理

里山を活かした様々な保育プログラム

子ども達が日常的に里山にいることで、気持ちが元気に、保全も進む

4) 遠方からも、さまざまな若い人々・子どもたちが移住

・青山氏の願い

地域の人々の暮らしの息遣いを感じられる里山の自然の中で、保育活動を行うことが大切。地域の文化も保育資源、地域の人々からも理解とエネルギーをもらう。そのためコミュニケーションも大切にしている。活動が地域作りにもつながることを願う。

・日常的に子ども達が里山にいることでの保全効果・元気効果

・様々な分野の人々との交流促進

・町による通園児への補助制度が創設

・地域活性化効果—都会から通わせたい父母が、町に移住—

町内への意識の高い移住者の増加。「大地」に入園するためこれまでに41家族が町内に移住。直近の5年間では毎年3～5家族のペースで移住している。

幼少世代を対象にした「里山幼児教室」の取組み(いわゆる「森のようちえん」)を促進することで、子ども達のみならず、親世代を含めた若手世代を里山へ近づける契機となる。本活動は里山の持つ魅力や可能性を啓発し、山村へ若手世代層を呼び戻す力となることが期待される。また里山周辺の山村の多様な生業を作り出すことで、里

山林の保全・整備・活用（資源利用のほか観光利用、農業等との連携等）といった里山とかかわるライフスタイルを持った次世代の定住促進へと導くことが可能である。

(3) 里地里山の生きものを利用した地域づくり (2分) 13:45~47

1) 生きものブランド作りと活用

里地里山に生息する生き物をシンボルにした地域ブランド作り

- ・ 産品開発、エコツーリズム、環境教育に利活用

2) 各地の事例 トキからミツマタまで

- ・ 環境省事業により情報収集、実証調査を実施。

「まもる」「のこす」「つたえる」観点から様々な取組みがある。

事例紹介を簡単に読み上げ

- ・ サイトで公開（わかりやすい文章と内容となっている、ぜひ参考に）

(4) 里なびの取組みから (2分) 13:47~49

- ・ 環境省では、「里なび研修会」事業を7年間全国60箇所の里地里山地域で実施。
- ・ 地域ごとのさまざまな経験から生まれた適正な管理のための知恵を活かして人づくりを進める。地域での自主的な活動を尊重しつつ、活動地域間の「人」と「情報」のネットワークを構築することで活動を活性化し、拡大していく。
- ・ 生物多様性を見据えた里地里山の多様な資源を活用した持続的・効果的な取組方策について検討。
- ・ 計画策定方法、多様な主体との連携協働手法、様々な保全技術、活用技術を収集し整理。技術的方策集としてホームページ里なびに取りまとめ掲載（主体別、手法別、活用別に索引可能）。理解しやすく明瞭な文章と図表で公開中。

3. 取組を広げ活性化するためのアイデアと手法を考える (5分) 13:49~54

(1) 地域資源と人の発掘とかかわりの創出（秦野のたっしやもんによせて）

- ・ 9月2~4日で上地区・北地区等で中央大学のたっしやもん調べも予定されている。

(2) ネットワーク型の学びの推進

- ・ 里地里山地域住民だけでなく、外部の多様な人々の経験やアイデアも取り込み生かしていく視点。

(3) 持続・継続のためのアイデア、そして生業作りを

- ・ 留意点（公共空間におけるメリット創出後の危機、初動からの行政・市民の関係構築の重要性）

4. おわりに一次世代につなぐために考えること (1分) 13:54~55

- ・ 3. 1 1 後の新たな生き方、暮らし方を模索。そのヒントが里山にある。次世代を生きる日本人を育てるのはまさに秦野のような里山ではないか。
- ・ 秦野は多様な属性の人が居住し、首都圏にあり人・モノ・情報を受け止めながら、古来から受け継がれた里地里山環境を活かして、新しい子育て・人づくりができる絶好の場。